

11/23 Sun.
holiday

第146回 横浜マチネーシリーズ
横浜みなとみらいホール 14時開演
YOKOHAMA MATINÉE SERIES No. 146 / Yokohama Minato Mirai Hall 14:00

指揮
Conductor
つう(ソプラノ)
Tsū (Soprano)
与ひょう(テノール)
Yohyō (Tenor)
運ず(バリトン)
Unzu (Baritone)
惣ど(バス・バリトン)
Sōdo (Bass Baritone)
児童合唱
Children's Chorus
第1コンサートマスター
First Concertmaster

團伊玖磨
IKUMA DAN

[休憩]
[Intermission]

山田和樹 *-p.4*
KAZUKI YAMADA

種谷典子 *-p.6*
NORIKO TANETANI

小堀勇介 *-p.6*
YUSUKE KOBORI

大西宇宙 *-p.7*
TAKAOKI ONISHI

三戸大久 *-p.7*
HIROHISA SANNOHE

赤い靴ジュニアコーラス *-p.8*
AKAIKUTSU JUNIOR CHORUS

林 悠介
YUSUKE HAYASHI

歌劇〈夕鶴〉(演奏会形式) *-p.10*
Yūzuru (Concert style)

作: 木下順二
Text: JUNJI KINOSHITA

I. 第1部 [約85分]

II. 第2部 [約30分]

The performance of this work is licensed by Schott Music Co. Ltd.,
Tokyo on behalf of Boosey & Hawkes Music Publishers LTD

副指揮: 岡本 陸

合唱稽古ピアニスト: 湯浅加奈子

児童合唱指導: 酒井悦子

字幕操作: Zimaku プラス (日本語字幕編集: 増田恵子)

11/27 Thu.

第653回 定期演奏会
サントリーホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No. 653 / Suntory Hall 19:00

指揮
Conductor
ピアノ
Piano
第1コンサートマスター
First Concertmaster

シベリウス
SIBELIUS

バルトーク
BARTÓK

[休憩]
[Intermission]

サーリアホ
SAARIAHO

シベリウス
SIBELIUS

ハンヌ・リントウ *-p.5*
HANNU LINTU

ピョートル・アンデルシェフスキ *-p.8*
PIOTR ANDERSZEWSKI

林 悠介
YUSUKE HAYASHI

交響的幻想曲〈ポホヨラの娘〉作品49 [約14分] *-p.13*
Pohjola's Daughter, op. 49

ピアノ協奏曲 第3番 ホ長調 [約23分] *-p.14*
Piano Concerto No. 3 in E major
I. Allegretto
II. Adagio religioso – Poco più mosso – Tempo I
III. Allegro vivace

冬の空 [約9分] *-p.15*
Ciel d'hiver

交響曲 第7番 ハ長調 作品105 [約21分] *-p.16*
Symphony No. 7 in C major, op. 105

主催: 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成: 文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動))
文化庁 独立行政法人日本芸術文化振興会
協力: 横浜みなとみらいホール

主催: 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成: 文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動))
文化庁 独立行政法人日本芸術文化振興会
協力: アフラック生命保険株式会社

指揮

山田和樹

KAZUKI YAMADA, Conductor

世界の“ヤマカズ”が振る 心震わす〈夕鶴〉



©読響

今年6月にベルリン・フィルにデビューを果たすなど世界で活躍する“日本のエース”が日本オペラの最高傑作〈夕鶴〉を振り、究極の美の世界へと誘う。

東京芸術大学指揮科で小林研一郎、松尾葉子に師事。2009年ブザンソン国際コンクール優勝を機に、欧州でのキャリアをスタート。サンクトペテルブルク・フィル、パリ管、フランクフルト放送響、フィルハーモニア管、ドレスデン・フィル、BBC響、チェコ・フィルなどへ客演。12年にはサイトウ・キネン・フェスティバル松本で小澤征爾の代役を務めた。17年に〈魔笛〉でベルリン・コーミッシェ・オペーにデビュー以降、モンテカルロ歌劇場での〈ヴォツェック〉などオペラでも活躍。25年はバーミンガム市響とのBBCプロムス再登場や日本ツアーを成功へと導いた。

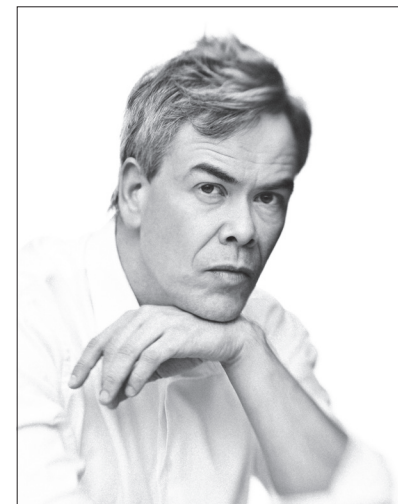
スイス・ロマンド管首席客演指揮者を経て、現在バーミンガム市響音楽監督、モンテカルロ・フィル芸術監督兼音楽監督を務める。26/27年シーズンからベルリン・ドイツ響首席指揮者兼芸術監督に就任予定。日本では、東京混声合唱団音楽監督兼理事長、横浜シンフォニエッタの音楽監督を務め、26年4月に東京芸術劇場の芸術監督（音楽部門）に就任予定。渡邊暁雄音楽基金音楽賞、齋藤秀雄メモリアル基金賞、芸術選奨文部科学大臣新人賞、モナコ公国の文化功労勲章シュヴァリエなど受賞多数。読響との『マラー 〈巨人〉』などCDを多数リリースしている。18年度から23年度まで読響の首席客演指揮者を務めた。ベルリン在住。

指揮

ハンヌ・リントウ

HANNU LINTU, Conductor

鬼才リントウが お国もので その真価を発揮する



©Veikko Kähkönen

コンサートとオペラの両方で目覚ましい活躍をみせるフィンランドの鬼才が、母国を代表する作曲家シベリウスなどを指揮。北欧の空気を思わせる清新なサウンドで会場を満たす。

1967年フィンランド生まれ。シベリウス音楽院でチェロとピアノを学び、ヨルマ・バヌラに指揮を師事。シエナのキジアーナ・アカデミーでチョン・ミョンフンのマスタークラスに参加し、94年にはベルゲンで行われたノルディック指揮者コンクールで第1位を獲得した。

これまでにタンペレ・フィルの芸術監督および首席指揮者、アイルランドRTÉ国立響の首席客演指揮者、ヘルシンボリ響とトゥルク・フィルの芸術監督を歴任。2013年から21年までフィンランド放送響の首席指揮者を務め、現在はフィンランド国立歌劇場の首席指揮者、ポルトガルのグルベンキアン管の音楽監督を務めている。25年からはラハティ響のアーティストック・パートナーおよび国際シベリウス音楽祭の芸術監督としての任期を開始し、26年からはシンガポール響の音楽監督に就任予定。世界各地の著名楽団にも客演しており、ベルリン・フィル、ニューヨーク・フィル、バイエルン放送響、クリーヴランド管、ボストン響、シカゴ響、フランス放送フィル、ベルリン・ドイツ響などを指揮した。またパリ・オペラ座、バイエルン国立歌劇場、ブレゲンツ音楽祭などで、〈ドン・ジョヴァンニ〉〈さまよえるオランダ人〉〈ペレアスとメリザンド〉〈サロメ〉など幅広いレパートリーで手腕を発揮している。CDもオンディーヌやBISレーベルから多数リリースしている。読響初登場。



©STUDIO KUMU

つつ (ソプラノ)

種谷典子

NORIKO TANETANI, Soprano

隅々までコントロールされた美声で聴き手を魅了する新星。広島県出身。国立音楽大学声楽専修および同大学院を首席で卒業・修了。学部卒業時に武岡賞を、大学院修了時に声楽専攻最優秀賞を受賞。新国立劇場オペラ研修所修了後、文化庁新進芸術家海外研修制度研修員としてミラノおよびルガーノへ留学。第91回日本音楽コンクール声楽部門（歌曲）第2位など受賞多数。21年9月宮本亜門演出の〈魔笛〉でパパゲーナに抜擢され二期会デビュー。東京二期会、新国立劇場などで〈椿姫〉題名役、〈フィガロの結婚〉スザンナなどを歌い、存在感のある歌唱で好評を博した。そのほか、ベートーヴェン〈第九〉、マーラー〈交響曲第4番〉などのソリストとして広島響、東京フィル、新日本フィル、東京響と共演し、常に高い評価を得ている。二期会会員。

輝かしい声を持つ気鋭。福島県出身。国立音楽大学卒業、同大学院修了。日本音楽コンクール優勝、静岡国際オペラコンクール入賞、東京音楽コンクール第2位など受賞多数。文化庁新進芸術家海外研修制度研修生としてイタリア留学中の2016年、ペーザロのアカデミア・ロッシニアーナに参加し、ロッシーニ・オペラ・フェスティバルでの〈ランスへの旅〉リーベンスコフ伯爵に抜擢され、成功を収めた。チロル祝祭歌劇場の〈アルジェのイタリア女〉リンドーロで欧州デビューを飾り、メドック音楽祭、バチカン音楽祭などに出演。近年は、びわ湖ホール、日生劇場、藤原歌劇団などで〈連隊の娘〉トニオ、〈愛の妙薬〉ネモリーノ、〈セビリアの理髪師〉アルマヴィーヴァ伯爵などを歌い、好評を博す。読響とは19年12月の初共演以降、共演多数。



©T. Tairadate

与ひょう (テノール)

小堀勇介

YUSUKE KOBORI, Tenor



©Simon Pauly

運ず (バリトン)

大西宇宙

TAKAOKI ONISHI, Baritone

国際的に活躍する俊英。武蔵野音楽大学および大学院、ジュリアード音楽院で学び、リチャ・アルパネーゼ＝ブッチーニ国際声楽コンクールなどで優勝。シカゴ・リリック・オペラの所属歌手として多数の演目に出演し活躍。2019年セイジ・オザワ松本フェスティバル〈エフゲニー・オネーギン〉で題名役を務めて日本オペラデビュー。以降、新国立劇場、びわ湖ホールなどに出演するほか、ダラス・オペラ〈ラ・ボエーム〉、ミネソタ・オペラ〈セビリアの理髪師〉に出演して成功を収めた。ウィーン響、ニュルンベルク響などと共演しているほか、アスペン音楽祭やヴェルビエ音楽祭に出演。五島記念文化賞オペラ新人賞、芸術選奨文部科学大臣新人賞など受賞多数。読響とは22年9月以降、3度目の共演。

表現豊かな歌唱を誇る大器。武蔵野音楽大学卒業。二期会オペラ研修所修了。日伊声楽コンコロソ第3位、イタリア声楽コンコロソ・シエナ部門金賞受賞。文化庁新進芸術家海外研修制度でウィーンへ留学。〈魔笛〉の武士Ⅱで二期会デビュー以降、〈蝶々夫人〉ボンゾ、〈フィガロの結婚〉バルトロ、〈トスカ〉スカルピアや、新国立劇場では〈ばらの騎士〉〈リゴレット〉〈修禅寺物語〉〈鹿鳴館〉などに出演。近年では、佐渡裕プロデュース・オペラ、全国共同制作オペラなどに出演し、好評を博す。そのほかミュージカル〈スウィーニー・トッド〉などオペラ以外の舞台作品にも積極的に取り組んでいる。〈第九〉をはじめ声楽を伴う管弦楽曲のソリストとしても活躍。武蔵野音楽大学講師。二期会会員。



©小山田那哉

惣ど (バス・バリトン)

三戸大久

HIROHISA SANNOHE,
Bass Baritone

11/23

横浜マチネー

Artist

児童合唱

赤い靴ジュニアコーラス

AKAIKUTSU JUNIOR CHORUS, Children's Chorus

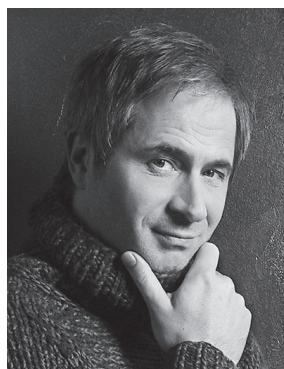
横浜・山下公園への「赤い靴はいてた女の子」像建設を主導するなど、地域に根差した文化活動を展開する「赤い靴記念文化事業団」が1985年に発足させた児童合唱団。横浜らしい水兵の制服で神奈川県・横浜市の行事や合唱祭に出演。また国内外の合唱団との交流コンサート、県・市のホール主催のオペラやコンサートへの出演など活躍を続けている。神奈川県民ホール・オペラシリーズ〈ばらの騎士〉〈トゥーランドット〉〈オテロ〉、同ホール主催の「なつかしい日本の歌〜團伊玖磨メモリアル〜」や2025年3月の「フィナーレコンサート」などにも出演し、好評を博した。横浜みなとみらいホール主催の「こどもの日コンサート」には毎年出演している。これまでに花とライオン児童合唱音楽賞、横浜文化賞奨励賞を受賞。

11/27

定期

Artist

世界中の主要なコンサートホールで演奏している、現代を代表する傑出した音楽家の一人。ワルシャワ生まれ。ドイツ・オーストリア古典派を中心としたレパートリーを得意としつつ、バルトーク、ヤナーチェク、シマノフスキ作品などでも高い評価を得ている。これまでにウィーン・フィル、ベルリン・フィル、ロイヤル・コンセルトヘボウ管、ロンドン響、シカゴ響、パリ管など世界の著名楽団と共演。モーツァルトの協奏曲では、ヨーロッパ室内管、スコットランド室内管などを弾き振りして、好評を博した。専属のワーナー・ミュージックなどから多くのCDをリリースし、グラモフォン賞や『BBCミュージック・マガジン』誌の年間最優秀レコード賞など多くの賞を受賞。読響には2018年に続き、2度目の登場。



©Simon Fowler

ピアノ

ピョートル・
アンデルシェフスキ

PIOTR ANDERSZEWSKI, Piano

團伊玖磨

歌劇〈夕鶴〉（演奏会形式）

〈夕鶴〉のあらすじ

いつの時代か、どこ場所かもわからない雪の中の村。そこに住む純朴な青年・与ひょうは、美しい妻・つうと貧しくも幸せに暮らしていた。つうは機織りの才能を持ち、村の子供たちに慕われている。与ひょうは、^{はた}罫にかかった鶴を助けた過去がある。そして、つうが機織りをしている間は部屋の中を覗かないという約束をしているのだった。

ある日、村人の運ずと惣どは、つうが織った美しい「千羽織」の噂を聞きつけ、金儲けをしようと、つうに^{たず}尋ねるが、つうは「お金」という概念が理解できず、言葉がわからない。そのやりとりから運ずと惣どは、つうが鶴の化身と考え、与ひょうをそそのかして、つうに千羽織を大量に作ってもらうよう企てる。

貧困からの脱却に目がくらむ与ひょう。だんだん変わっていく与ひょうに心を痛めるつう。子供たちと童歌を歌っても心は晴れない。つうは与ひょうに強要され、二枚だけ布を織ることにして、夜通し機織りを続ける。しかし、「機織りの様子を決して覗かない」と約束したはずの与ひょうは、機屋の中を覗いてしまう。そこには、自らの羽を抜きながら「千羽織」を織る鶴の姿があった。

与ひょうは、^{ぼうぜん}茫然自失でつうを探し回り、ついには気絶する。しばらくして機屋から出てきたつうは、二枚の布を渡し、「姿を見られてしまったので、もうここにはいられない」と別れを告げる。つうは鶴の姿に戻り、夕空高く飛び去る。与ひょうは、布を抱き永遠の別れを嘆く。与ひょうがつうを呼ぶ悲しい声が響く中、物語は終わる。

日本オペラの金字塔

團伊玖磨（1924～2001）は、6つの交響曲、7つのオペラ、約120本の映画音楽、合唱、歌曲など幅広い作風で国民的作曲家として知られる。その深い教養と鋭い視点は、ベストセラー随筆『パイプのけむり』やテレビ・ラジオ出演にも結実し、戦後日本の文化を牽引した。彼の創作は、歴史・伝統の堅牢な土台に根ざし、流行に流されない「本物の美」を追求するものである。

その代表作である歌劇〈夕鶴〉は、日本の民話「鶴の恩返し」を基にした木下順

二の戯曲（1949年『婦人公論』発表）を忠実にオペラ化。オペラ化するなら「一語一句変えず」との木下の要請に応じて、團は日本語の詩情を活かしたオペラを完成させた。元々戯曲の付帯音楽（フルート、オーボエ、ファゴット、ハーブによる四重奏）を手掛け、「ぶどうの会」の旅公演でオペラ化を確信していたこともあり、柔軟な準備の上で作曲されている。また実際には、言葉を音楽の流れに応じて絶妙にカット、繰り返しなどを行っている。

〈夕鶴〉作曲中の團は、1950年、NHK懸賞特賞（交響曲第1番）の賞金で鎌倉に移り、いくつかの歌曲集や〈そうさん〉など童謡を並行して作っており、最終的には1951年クリスマスに完成、翌年大阪で初演された。1956年にオーケストラ・ジョンを改訂した現行版によるチューリヒ音楽祭での海外初演以来、アメリカ、ロシア、中国など世界中で上演され、約900回の上演を誇る日本屈指のオペラである。

その魅力は、語られ、歌われる日本語の美しさ、戯曲の台本として磨き上げられた言葉の簡潔さと透明感。鶴の化身である「つう」は標準語を使い、他の人物は田舎訛り。「お金」の概念を持たない鶴と、「お金」によっておかしくなっていく人間の比較にもなっている。



1994年〈夕鶴〉600回記念公演

二つの部分からなる全一幕

【第1部】

〈前奏〉は、荘厳な幕開けと、透明感ある木管群とハーブによる機織りリズムなど主要な動機を凝縮した音楽。村の子供たちと与ひょうの純朴さを象徴する童歌〈じやんにきせるふとぬうの〉（児童合唱）や、つうの登場〈まあ、あんた〉、運ず、惣どの登場となる〈あの女が与ひょうの女房か〉、つうと対面するが会話が成立しない〈あっ！こ、これは留守の間に〉を経て、「まるで鳥のような気配」に違和感を持って、鶴や蛇が人間の女房になってしまう逸話を歌う〈鶴や蛇がのう〉、運ず、惣どが与ひょうに金儲けのために千羽織を織るようにけしかける部分までで登場人物の紹

介や前提が一通り歌われる。

児童合唱の〈かごめかごめ〉を挟み、つうのアリア〈与ひょう、私の大事な与ひょう〉が、与ひょうとの関係、自身の身の上を説明しつつ、愛の純粋さを歌い、変わっていく与ひょうへの不安を、感情の起伏とともに見事に表現する。続いて、夫婦の茶の間での会話、愛の二重唱を短く挟みつつ、二人のすれ違う思いを描き、つうの心情を歌う〈こうして、じっとあんたに抱かれています〉では深い愛情が表現されるが、与ひょうは突如激昂して「布を織れ」と駄々をこねる。つうは「お金」という理解できないものに対して悲痛な怒りをぶつけ、与ひょうの巾着袋に入っているお金を見て歌うつうのアリア〈これなんだわ。みんなこれのためなんだわ。おかね?〉で、諦めの心境を持ちつつ、布を織る決意を固める。いつもの約束「機織りしているところを決して覗かない」という言葉とともに、機織りが始まるが、与ひょうはついに約束を破って覗いてしまい、つう＝鶴であることを知って茫然自失で気絶。第1部は機織りの音とともに終わる。

【第2部】

第2部は楽曲の要素をちりばめた〈間奏曲〉から始まる。運ず、惣どが気絶した与ひょうを介抱していると、2枚の布を持って機屋から出てくるつう。「あんた、とうとう見てしまったのね」と与ひょうに告げて、つうのアリア〈与ひょう、からだを大事にしてね、いつまでも、いつまでも、元気でいてね〉で、切々と最後の別れを歌う。「あたしはもう人間の姿をしていることができないの。あのもとの空へ、帰っていかなければならないのよ。さようなら、さようなら」と言い残してつうは消える。

児童合唱が「おばさん、おばさん、うた唄うてけれ」と遊びに現れるが、つうはいない。「いつ帰るんけ?」と与ひょうに尋ねる。すると、鶴が一羽、夕空を飛んで去っていくのが見える。与ひょうの痛切な「つうー」という叫びが、鶴を追うように空に響き、物語は終わる。

〈西 耕一 音楽評論家〉

作曲：1950～51年 初演：1952年1月30日、大阪／演奏時間：第1部 約85分、第2部 約30分
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ、クラリネット、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン2、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、銅鑼）、ハープ、弦五部、独唱、児童合唱

シベリウス

交響的幻想曲〈ポホヨラの娘〉 作品49

ジャン・シベリウス（1865～1957）は1930年頃から創作沈黙期に入る。それまでこの作曲家は、管弦楽曲の分野において交響曲と交響詩の間を行きつ戻りつしてきた。その谷間に咲く花が「交響的幻想曲」なるジャンルだ。

リストは交響詩を次のように定義した。「標題という補助手段によって作曲家は、みずからの思いの方向や、題材を理解するための観点をはっきりと示す」。交響詩の創始者は「標題」を、具体的な描写対象というよりも、音楽を形作するためのコンセプトとして指定する。

シベリウスも同様の考えを持っていたと思われる。だからこそ、交響曲と交響詩の間をさまよい、交響的幻想曲（管弦楽によるさまざまな楽想の多部分作品）なるタイトルまで用いた。この“さまよい”は結局のところ、シベリウスの個性として諸作品に浮かび上がることになる。

そのひとつが〈ポホヨラの娘〉である。「ポホヨラの娘」とは「北国の乙女」の意。英雄ワイナミョイネンが懸想した相手である。この故事はフィンランド地方の叙事詩『カレワラ』の第8章に基づく。英雄は乙女に求愛する。乙女は難題を英雄に突きつけ、その試練を乗り越えれば同道する旨、言い渡す。ワイナミョイネンはそれらに取り組むも挫折。ポホヨラを離れる。

シベリウスは当初、この交響的幻想曲を〈ワイナミョイネン〉としたが、楽譜出版社の反対にあい〈英雄の冒険〉へと変更。それでもまだ版元の理解を得られなかったので、最終的に〈ポホヨラの娘〉として刊行した。

低音域の和音上でチェロがソロを弾き始める。中音域、高音域の楽器群へと主役が移り、背景の厚みも増していく。多くの声部が合流したところでファンファーレが鳴り響く。以後、さまざまに楽想が変化するのは物語の（情景というより）展開を反映するから。ソナタ形式などの原理によらない管弦楽曲を指して交響的幻想曲とするのは、それほど悪い命名ではない。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1906年／初演：1906年12月29日、サンクトペテルブルク／演奏時間：約14分
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、ホルネット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、ハープ、弦五部

バルトーク
ピアノ協奏曲 第3番 木長調

ベラ・バルトーク (1881~1945) は1940年にアメリカに渡って以来、創作力の低下に悩まされた。ところが、大きな病が発覚したところから突如、その意欲に火がつく。精神の内に満ちた創造性は、バルトークをして、かかりつけの医師に「唯一の心残りはカバンをいっぱいにしたまま去らねばならないことだ」と言わしめた。

1945年、その成果のひとつとして、また愛妻への遺産として作曲家は、ピアノ協奏曲第3番を書き上げる。バルトークの妻ディッタは、かつて夫に師事したピアニストだった。自分の死後、妻がこの曲を弾き、またその楽譜を出版することで、生計を立てることができるかもしれない。バルトークはそう考えた。

鍵盤でも腕を鳴らした作曲家が、自作自演のために書いたピアノ協奏曲第1番・第2番と比べると第3番は、その演奏技術の点でいくぶんか難易度が低く、創作原理の点では18世紀以来の伝統に即してはいささかマイルドである。バルトークは最後の17小節のみオーケストレーションを終えられなかったが、助手のセアリーがそれを補筆した。

第1楽章 楽章半ばのホルンの独奏によって、提示部と展開部以下とを分ける、明確なソナタ形式。最初は和弦的に奏した第1主題を、再現部では対位的に示すなど、バロック風の書法を試すのは、晩年に特徴的なスタイルだ。導音（主音に対してその半音下の音）を慎重に避けるので、調性は旋法的に響く。

第2楽章 ABAの三部形式。五音音階風の節回しが耳をひく。木管楽器が鳥のさえずりを模すところは、愛玩したムクドリムクドリの鳴き声をピアノ協奏曲第17番に引用したモーツァルトの故事を思わせる。

第3楽章 ABACADAと進むロンド形式。独奏ピアノとオーケストラとで、1拍ずつれたままヘミオラ（小さな3拍子ふたつを大きな3拍子ひとつと取ること）で進むロンド主題が面白い。エピソード部分（B・C・D）は毎回、楽想を変える。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1945年（オーケストレーション未完）、同年補筆／初演：1946年2月8日、フィラデルフィア／演奏時間：約23分

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2（バスクラリネット持替）、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル、トライアングル、シロフォン、銅鑼）、弦五部、独奏ピアノ

サーリアホ
冬の空

フィンランドの作曲家カイヤ・サーリアホ (1952~2023) は、天空にまつわる作品をよく書いた。〈光の弧〉(1986年)、〈ソラル〉(1993年)、〈星空〉(1999年)、〈小惑星4179：トウターティス〉(2005年) などが作品リストに並ぶ。そのうち3部からなる管弦楽曲〈オリオン〉(2002年) は、とりわけ大きな楽器編成を要する作品として知られている。

海神ポセイドンの子・狩人オーリーオーン（オリオン）は、狩猟神アルテミスと恋に落ちるが、その関係を嫌った女神の兄・光明神アポロンの差し向けた毒サソリに襲われ、命からがら海に逃げる。ところが、アポロンにそそのかされたアルテミスが、そうとは知らずに矢を放ち、恋人を射殺す。狩猟神の弓の腕うでが仇に。嘆き悲しんだアルテミスは、恋人をせめて空に上げてほしいと父親ゼウスに懇願し、大神がこれを受け入れる。オーリーオーンは今日、（北半球の）冬空に明るく輝く。以上が「オリオン座」誕生の次第である。

〈オリオン〉の第2曲 冬の空「Winter sky」はまさに、この星座の浮かぶ冬の空を描く。サーリアホは2013年、この第2曲を単独の管弦楽曲として、編成を縮小した上で編み直す。その際、前者との混同を防ぐため、タイトルをフランス語で「Ciel d'hiver」とした。

薄墨を垂らしたような響きの雲が垂れ込める中、ピッコロ、ヴァイオリン、クラリネット、オーボエ、トランペットが旋律をリレーする。やがて相互の距離を縮め、カノンのようにポリフォニックに重なり合う。そこに管弦打楽器が合流し、サウンドはホモフォニックに。響きの雲は厚くなり、内側でなにかをうごめ蠢かせつつ混沌とする。しばらくすると各声部が階段を昇るように音型を受け渡し始める。雲は徐々に薄くなっていく。弦打楽器、ハープ、ピアノが微細にまたたく中、チェロとピッコロが静かに浮かび上がり、虚空に消える。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：2002年（Winter sky）、2013年（Ciel d'hiver）／初演：2003年、クリーヴランド（Winter sky）、2014年、パリ（Ciel d'hiver）／演奏時間：約9分

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2（コントラファゴット持替）、ホルン4、トランペット2、トロンボーン2、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、ヴィブラフォン、銅鑼、クロティル、シェルチャイム、グラスチャイム、ベル）、ハープ、ピアノ、チェレスタ、弦五部

シベリウス

交響曲 第7番 八長調 作品105

交響曲第7番はシベリウスの“さまよい”（13ページ参照）の到達点である。1924年にこの作品を書き上げて初演の舞台に付したとき、作曲家はこれを「交響的幻想曲」として発表した。単一楽章の中規模な管弦楽曲に交響曲、すなわち多楽章のオーケストラ・ソナタと名をつけて披露することに迷いがあったのだ。

ところが、翌年の楽譜刊行に向けて考え抜いた末、シベリウスは出版社に「もっともふさわしいタイトルは交響曲第7番（単一楽章）である」と宣言した。交響曲と交響詩の間をさまよった作曲家は、ここでひとつの答えを得たことになる。

創作史に目を向ければ、シベリウスが草稿段階ではこの曲を4楽章制で書いていることが分かる（それ以前は3楽章制で構想）。そのうち第2楽章（緩徐楽章）を独立させ、そこに残りの楽章の素材を繰り入れることで、交響曲の各楽章を内包する単一楽章の管弦楽曲ができ上がる。ソナタ形式の劇的展開を擬似的に含むので（後述）、抽象的なドラマを下敷きとした交響詩と言ってもよい。つまりシベリウスは一周回って、ソナタ形式そのものを標題として取り扱っているというわけだ。

作曲家は「交響的幻想曲」なる言葉を1905年ごろから日記や手紙に書き綴り、〈ポホヨラの娘〉のタイトルにし、今やそれを交響曲と合一させてしまった。ここに交響曲史のひとつの終着点を見ることができよう。

単一楽章ながら第7番は、かつての「幻想曲」の名の通り、楽想の異なるいくつかの部分からなる。作曲家はそこに、交響曲の楽章を思わせる各セクションを巧妙に織り込んだ。だから作品は、大きく緩徐、急速、舞曲、急速（フィナーレ）といった流れを持つ。

軸となるのはトロンボーン³の五音音階風の主題。作曲家はこれを前段（緩徐部）・中段（急速部）・後段（フィナーレ部）に配することで、提示・展開・再現のソナタ形式的な論理構成を、作品に擬似的に埋め込んでいる。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1923～24年／初演：1924年3月24日、ストックホルム／演奏時間：約21分
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替2）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部